

教師の  
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)  
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

## 「我慢する力」を育てるステップ



「レジリエンス」という言葉が話題になっています。「ストレスを跳ね返す心・折れない心」という意味ですが、私は「めげない心」と捉えています。

「めげない心」は「我慢する力」と「頑張る力」によって培われます。今回は、卒業式の練習を通して、我慢する力を育てるステップを紹介していきます。

### 1 見たい気持ちを受け止める

まずは入場の練習です。司会者の合図で会場のドアが開き、卒業生が入場してきます。在校生は拍手で迎えるのですが、背伸びをしたり卒業生の歩きを目で追ったりして、拍手を忘れてしまいます。

それはまだいいほうです。兄弟や知り合いの卒業生が入場してくると立ち上がって指をさしたり、卒業生の歩きに合わせて体を回転させたり、隣の友だちと小声で話をしたりします。先生からは、「前を向く。卒業生を見てはだめ」、「拍手を止めない」、「喋らない」という注意が飛びます。その結果、練習がやり直しになります。

## Q1

やり直しの際、肅然として卒業生の入場を迎えるために、どんな指示をしますか。

- ① 前を向いたまま拍手をしなさい。
- ② 目を閉じて拍手をしなさい。
- ③ 卒業生に首だけを向けていいよ。
- ④ 喋らずに卒業生を見ていいよ。

①は理想の姿です。でも、それができないから叱られているのです。前を向くということは、卒業生を「見るな」ということです。「見るな」と言われたら見たくなるのが人情です。

「見たい」気持ちに蓋をして拍手をするのですから、気もそぞろになります。先生に注意された時は前を向くのですが、しばらくすると背伸びをして卒業生を見てしまいます。

②は、先生が「卒業生が目に入るから見てしまふ」と考えたのでしょう。しかし、これは先生の予想とは裏腹に子どものいたずら心に火をつける結果になります。これら2つに比べれば、③は「見たい」という子どもの思いを満たしてくれます。

ですが、子どもに我慢する力を実感させるのは、④です。

在校生は卒業生の入場する姿を見たいのです。「何で見るんだ!」と子どもに詰問しても、「見たいからです」という禅問答になってしまいます。先生は、「見ていいよ」の指示に「立って」を加えます。座って拍手するはずなのに、立っていいという予想外な指示をされた子どもたちは困惑します。人は思いがけない嬉しさに出会う

と喜びよりも戸惑いを覚えるようです。子どもたちは不思議な顔をして立ちあがります。

そして、感謝が感激に変わり、先生の期待に応えたいと思います。

先生は微笑みながら、「見たい気持ちはよくわかる。立ったほうがよく見えるでしょう。満足したら座って拍手に専念しよう」と子どもに優しく語りかけます。

中には、すぐに座る子どももいます。先生は目を大きく見開き、「もう満足なの」と驚きの表情をします。子どもは、「すごいでしょう」と言わんばかりのすまし顔で先生を見つめ返します。

一人、二人と座る子どもが出ます。気づいた子どもがそれに倣います。そうして、徐々に座る子どもが増えていきます。

すると、立っている子どもが座ろうかどうしようかと迷い始めます。「自分だけ立っているわけにはいかない」という意識が働くのです。良い意味での「みんなと同じにしなければ」という意識になります。

1分ほどで全員が座り終えます。その後は卒業生の入場をキョロキョロと見る在校生はいません。前を向いて、拍手のタイミングを計るために目だけが動いています。

自分たちの希望を叶えてもらったのですから、今度は自分たちが先生の期待に応える番です。人はしてもらうと、して返そうとします。

我慢する力は「やりたいことはやらせてもらえる」という期待感、「やりたいことは我がままとは受け取られない」という容認感、「自分はここに居てもいいんだ」という安心感がベースとなります。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。  
ベテラン先生によるケーススタディです。  
こんな時、あなたならどうしますか？

2 認める・感謝する・ほめる

卒業生の入場中、在校生は姿勢を正して立派に拍手をしていました。

Q2

先生はどんな言葉をかけますか。

- ① やればできるじゃないか。
- ② 座ってくれてありがとう。

①はほめているといえはほめていますが、素直に受け入れることはできません。それは、「やればできる」ということは、「今までやっていなかっただろう」という過去の否定と「これからはやれよ」という未来への強制を含んでいるからです。

何より、「言われなければやらないだろう。やれたのは先生のお蔭だよ」という恩着せがましさがあります。

ここでは、先生に対して感謝できません。「我慢する力」を育てるのは、②です。

子どもたちにとって、座ることは当たり前の行為です。本当は自分たちのほうが「見せてくれてありがとう」「望んでいることをさせてくれてありがとう」と先生に感謝すべきところなのに、先生のほうから、「ありがとう」とお礼を言ってくれます。

それによって、子どもは、感謝されるような素晴らしいことをしたのかと自分の行為をメタ認知できます。

ほめられたら嬉しいものです。人は、ほめられることで自分の行動が正しいことを知ります。

ほめられることで自覚的に行動しようとし、成長するのです。

また、自分をほめてくれる人は理解者です。人は、わかってくれる人の言うことは不平を言わずに受け入れようとしています。

私もかつて信頼する方から不本意なことを依頼されましたが、そんな素振りを見せずに承知したことがあります。他の人なら間違いなく断っていました。

子どもは、信頼できる先生から座ったことをほめられ、「我慢してよかった」と感じます。そして「我慢できる自分は偉い」という自信が生まれ、自己肯定感をもてるようになっていきます。

3 拍手が行動を向上させる

子どもたちに卒業生の入場の感想を聞くと、入場してから着席するまでの様子を思い浮かべます。着席までの流れがわかれば、その先の式の展開が見えるので、子どもは安心して自分の役割を自覚できます。

Q3

在校生に、自身の行動が卒業生の志気を高めることにつながるように言葉をかけます。何と言いますか。

- ① 在校生の拍手が卒業生のやる気を高めるんだよ。
- ② 在校生の一生懸命な姿を見ると、卒業生も負けるものと頑張るんだよ。

②は卒業生のプライドを刺激する効果はあるでしょう。しかし、優劣をつけることが練習の

ねらいではありません。

①のように在校生の心がこもった拍手に卒業生は心地良さを覚え、やる気を高めることになります。それは、身が引き締まり、拍手に応えるような態度を取ろうとするからです。

態度は気持ちの表れです。立派な態度は厳粛な雰囲気を作ります。

卒業生は、心から「おめでとう」という拍手をもらうことで誇らしい気持ちになれ、「ありがとう」と感謝の気持ちを態度で返そうとします。それは、厳粛な中にも温かさを感じさせます。

人に影響を与え、役立つ、尽くす喜びを実感することで「我慢」が「当たり前」に変わります。

満たされ、ほめられることで「我慢する力」のベースができ、人の役に立つということでも我慢が「頑張る力」に変容します。

